恋愛関係における葛藤と関係崩壊に関する研究

栗林克匡

(北星学園大学社会福祉学部)

キーワード: 恋愛関係、対人葛藤、対処方略

The Effect of Coping for Conflict in Romantic Relationship on Break-up

Yoshimasa KURIBAYASHI

(School of Social Welfare, Hokusei Gakuen University)

Key words: Romantic relationship, Interpersonal conflict, Coping strategy

目 的

恋愛関係における関係崩壊は様々な原因によって起こりうる。Hill ら(1976)によると、カップルの倦怠や、関心の相違を失恋の原因として挙げる割合は6割を超えていた。カップル間の対人的問題は対人葛藤として考えることができるが、葛藤があれば即、関係崩壊へと直接つながるわけではない。我々は葛藤が生じた際に、何らかの対処行動をとる。対処行動が有効に機能すれば、関係を修復する可能性もあるだろう。ではどのような葛藤の原因に対して、どのように対処すれば、関係崩壊を回避することができるのであろうか。和田(2000)は関係崩壊時の対処として説得・話し合い、消極的受容、回避・逃避を挙げているが、関係崩壊回避についての検討はなされていない。そこで本研究では、恋愛関係における葛藤の原因と対処方略との関連を検討し、また関係が存続している者と関係が崩壊した者とで葛藤原因と対処方略に違いがあるのかについても検討を行う。

方 法

調査参加者: 大学生 201 名(男性 87 名、女性 114 名)のうち、異性の交際相手との葛藤経験のある 94 名(男性 44 名、女性 50 名)が分析対象者であった。

質問紙の構成: 性別など基本的属性の他、以下の項目について回答させた。1)異性の交際相手との葛藤の有無と関係崩壊の有無、2)交際内容、3)Hill ら(1976)と大淵・福島(1997)を参考にした葛藤の原因 22 項目 6 段階尺度、4)藤森・藤森(1992)や大淵・福島(1997)などを参考にした葛藤対処方略 22 項目 5 段階尺度、5)葛藤後の関係の変化に関する項目、6)松井(1993)を参考にした関係崩壊後の反応 31 項目 5 段階尺度。本研究では、主に 1)3)4)を分析に用いた。

結果と考察

1.葛藤に関する項目の因子分析 葛藤の原因 22 項目および葛藤対処方略 22 項目について、それぞれ主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。固有値の推移および因子の解釈のしやすさの観点から、葛藤の原因は 5 因子、葛藤対処方略は 4 因子を抽出した。前者は、「2 人の意見や慣習の不一致」といった『意見・考え方の相違』因子、「相手が侮辱」「身体的危害」といった『危害』因子、「会う時間が少なくなった」など『疎遠』因子、「自分が独立を望んだ」という『自分の独立希求』因子、「2 人の立場の相違」「性態度の相違」といった『立場の相違』因子からなる。後者は、「話し合いの場を持とうとした」といった『話し合い』因子、「相手を責めた」「相手の言うことに耳を貸さない」など『攻撃』因子、「相手の意見に同調」といった『受容・回避』因子、「別れを考えた」「電話をかけなくなった」といった『拒絶』因子からなる。各因子を構成する項目の平均値を算出し、以下の分析に用いた。

2.葛藤の原因 と対処方略の関連 葛藤の原因 5 因子と葛藤対処方略 4 因子の関連を調べるために相関を求めた(表 1)。その結果、葛藤の生起理由の多くは、「疎遠」を除き、「攻撃」

という対処と関連していた。また「疎遠」が原因の場合は、「話し合い」という対処を取りやすいことがうかがえる。その他、「危害」「自己の独立希求」が葛藤原因の場合、「拒絶」という対処が取られやすいようである。

表 1 葛藤の原因と葛藤対処方略の相関

原因	対処方略			
	話し合い	攻撃	受容・回避	拒絶
意見・考え方の相違	.20	.45 ***	.16	.17
危害	-.01	.38 ***	.11	.29 **
疎遠	.22 *	.13	.14	.14
自分の独立希求	-.06	.36 ***	.04	.46 ***
立場の相違	.17	.34 ***	.16	.17

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

3.関係崩壊の有無別に見た葛藤の原因および対処方略の差異

交際相手との葛藤の後、関係が崩壊した者(関係崩壊群: N=49)と現在も交際が続いている者(関係存続群: N=44)とで、葛藤の原因および葛藤対処方略が異なるのかを検討するために、関係崩壊の有無を独立変数とした 1 要因の分散分析を行った(表 2)。その結果、葛藤の原因のうち「危害」「疎遠」「自分の独立希求」について関係崩壊群の方が存続群よりも強く原因として認識していた。「意見・考え方の相違」という原因は、関係存続・崩壊両群とも得点が高い一般的なものと言え、この原因のみで存続か崩壊かの分岐の判断は困難である。その他の原因の存在が崩壊に関わっており、複数の交際上の問題が組み合わさることで存続が難しくなるのかもしれない。また葛藤対処方略では「話し合い」において、関係存続群の方が崩壊群よりも得点が高く、関係回復に向けて試みているようである。相関の結果を見ると、多くの葛藤原因は「攻撃」的対処へと繋がりやすいが、関係存続のためには「話し合い」を意識的に行う必要があるといえよう。

表 2 関係崩壊の有無別の葛藤の原因
および葛藤対処方略の平均値とSD

	関係崩壊群	関係存続群	F 値
意見・考え方の相違	3.65 (1.00)	3.76 (1.23)	0.22
危害	2.13 (1.08)	1.72 (0.78)	4.35 *
疎遠	3.20 (1.13)	2.49 (0.98)	10.18 **
自分の独立希求	3.00 (1.22)	2.39 (1.28)	5.45 *
立場の相違	2.48 (1.13)	2.51 (1.04)	0.01
話し合い	3.28 (0.96)	3.68 (0.85)	4.27 *
攻撃	2.83 (1.05)	2.80 (1.02)	0.02
受容・回避	2.37 (0.92)	2.47 (0.84)	0.29
拒絶	3.39 (0.93)	3.02 (1.02)	3.38

※()内はSD

* p<.05 ** p<.01

引用文献

藤森・藤森 (1992). 人と争う 松井豊(編) 対人心理学の最前線 サイエンス社, Pp.141-151. / Hill 他 (1976). Journal of Social Issues, 32 (1), 147-168. / 松井 (1993). 恋ごろの科学 サイエンス社 / 大淵・福島 (1997). 心理学研究, 68, 155-162. / 和田 (2000). 実験社会心理学研究, 40(1), 38-49.